

- ① 先週金曜日、「脱原発」で2万人が首相官邸を囲みました。「脱原発」運動には楕円のように二つの焦点があります。政府などへの批判と自分達のライフスタイルへの反省です。「ヨハネの手紙一」にはそれと同じように、外にある「異端説」への反駁・批判と内側での「兄弟愛実践」への反省という二つの焦点が繰り返されます。
- ② 今日の箇所には「反キリスト」という見出のように、激しい「異端説」反駁の箇所です。「異端説」の主唱者は自分達のキリスト教理解が正しいとの自己意識をもった教会内グループでした。背景は紀元1世紀ごろのグノーシス主義という独自の宗教思想でした。この分野での研究の第一人者聖書学者荒井献氏は「人間の本来的自己と、宇宙を否定的に超えた究極的存在(至高者)とが本質的に同一であるという『認識(ギリシャ語の「グノーシス」)を救済とみなす宗教思想のことである」(『新約聖書正典の成立』p.94)と定義しています。当時小アジアのケリントスは、この思想にたって、キリスト教を解釈し、救済者・至高者は、仮に地上のイエスに宿ったという「仮現説」を主張しました。この主張に対して、地上のイエスは「仮」ではなく、その人そのものが神の啓示者・救済者(キリスト)あるという「キリスト論(イエス無しでは済まされない)」を展開したのが本書です。「イエスがメシヤ」(2:22)というの信仰的な逆説なのです。
- ③ 「異端」は「正統」が自己を絶対化して、異なるものを排除する硬直さへ問いとして起ってきます。教会の制度、職制、教義の固定化の弊害に反発して、自由な認識・悟りをもって救済理解とする運動が起って不思議ではありません。異なるものとは対話が必要です。その点、ヨハネは批判しつつも包むという対話を持っています(2:12-17。6/10レジュメ参照)。
- ④ しかし、グノーシス主義を枠としたキリスト教理解には限界、弊害があります。イエス無しで救済が成り立ちます。歴史のイエスの振る舞い、生涯こそが「神の出来事」であるという、逆説性がなくなってしまいます。つまり、イエスに関わらなくとも救済は成り立ち、救済を知識とすることが出来たのです。イエス(神)との関わりは、神がイエスにおいてこの世(人)と関わったことに基づき、その関係の中に生きる、実践的生き方(方法)を伴うことです。だから、「愛の戒めを守る」(3:11)を抜きにして救済に預かることは出来ないのです。「いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、だれからも教えをうける必要がありません。この油が万事について教えます」(2:27)。「油」、つまりイエスとの関係が大事なのです。イエスを「弁護者」(2:1)として彼に従うことが救いなのです。
- ⑤ 知識は人を分け、愛は人を繋ぐ、と申します。人を繋がない「信仰理解」はどこかあやしいのではないのでしょうか。ヨハネの主張はそこにあります。「案じるよりは生むがやすい」とは、人を繋いできた実践的、経験的知恵の諺です。批判的主体でありつつ、繋ぐ温かさを!。これがヨハネの主張なのです。